

聖書：マルコの福音書 2：23～3：6

説教題：イエスと安息日

日時：2025 年 6 月 29 日（朝拝）

今日は章をまたいで二つの記事を一緒に読むこととしました。どちらもテーマは安息日に関することです。この両方を一緒に取り上げる方が、より良くこのテーマについて学ぶことができると思うからです。まず一つ目は 2 章 23 節からです。ある安息日にイエス様が麦畑を通っておられた時のことです。弟子たちは道を進みながら穂を摘み始めました。これを見てパリサイ人たちが声を上げました。「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日にしてはならないことをするのですか」と。ここで非難されているのは他人の畑で穂を摘んだことではありません。それは申命記 23 章 25 節で次のように許されていました。「隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑で鎌を使ってはならない。」鎌を使って多量に取ることは禁じられていましたが、手で摘む程度は良いとされていました。問題はそのことではなく、これが安息日に行われたことでした。パリサイ人たちは言っています。「なぜ彼らは、安息日にしてはならないことをするのですか」と。ここで少し注意が必要なことがあります。それは本当にこれは安息日にしてはならないことだったのかということです。結論から先に言えば聖書にそのように書いてあるところはありません。ただ当時のユダヤ人の安息日の解釈に照らして、この行為は違反していたということです。先週パリサイ人たちは律法を大切に考えて、これを少しも犯すことがないように律法の周りに垣根となる規則をたくさん作ったことを述べました。不注意にも律法を破ることがないように、律法を囲うように、ここまでは良いがこれ以上はいけないというルールをたくさん作りました。当時のラビたちの律法に関する注解や解釈は後にミシュナーと呼ばれる文書にまとめられますが、そこに安息日にしてはならない 39 のリストが載っています。たとえばそれは以下のようなことです。種を蒔くこと、耕すこと、刈り取ること、束ねること、脱穀すること、ふるいにかけること、粉にすること、こねること、焼くこと、等々。このような一つ一つの行程は労働と見なされ、安息日にしてはならないとされていました。そしてこれを破ることは律法を破ることと同一視されました。イエス様の時代においてすでにこの解釈は定着していたようです。この基準に照らすと、弟子たちの行為は先ほどのリストの 3 番目「刈り入れをしてはならない」に相当すると判断されたのでしょう。そこで「あなたがたは律法を破った！」「なぜしてはならないことをするのか？」という問いとなったわけです。

これに対してイエス様は 25 節以降で答えて行かれます。まずイエス様は旧約聖書のダビデの例を引用します。彼と供の者たちは食べ物がなく空腹になった時、神の家に入り、そこにあった臨在のパン、すなわち備えのパンを食べました。サムエル記第一 21 章 1～6 節に記されています。それは「祭司以外の人が食べてはならないパン」とここでイエス様が言われている通り、律法の規定に反することです。にもかかわらず、その箇所はダビデを非難したり、断罪したりはしていません。むしろ容認しているように読めます。このダビデのケースと今日の箇所のイエス様の弟子たちのケースはよく似ています。今回弟子たちが安息日に穂を摘んだのもひもじかったからでしょう。空腹で肉体的必要を覚えていたからでしょう。それを見て安息日のルールに違反するから、してはならないことだ！と糾弾すべきなののでしょうか。このようにしてイエス様は律法をパリサイ人たちがするような仕方で解釈し、適用すべきではないということを示しています。それはあの旧約のダビデの記事と矛盾します。もちろん律法は大切なものです。しかしそれを困っている人にも冷たく当てはめ、それで相手を断罪し、殺すことが正しい律法の用い方ではないということです。

27 節でイエス様はこう言われます。「安息日は人のために設けられたのです。人が安息日のために造られたものではありません。」安息日は人間の祝福と益のために、それによって人間がより良くいのちに生かされるために定められました。安息日のルールが一番上にあって、それを守らせるために人間が造られたものではありません。パリサイ人たちの考え方はこの後者に傾いていました。そのように本末転倒であってはならないということです。これはもちろん人間の都合で安息日をどのように扱っても良い、軽んじてても良いという意味ではありません。私たちは安息日を制定された神の目的を良く理解し、受け止めることが大切です。安息日を神が定めたのは、それが人間に必要な存在だからです。人間はずっと働きっぱなしでいるべき存在ではなく、休むことが必要な存在だからです。すべてのことを脇に置いて神と向き合い、神を礼拝することが必要な存在だからです。私たちの創造者であり、また贖い主である神との交わりを通して真の休みとリフレッシュを得て、御心にかなう労働へと再び進むことが大切だからです。しかしパリサイ人たちの解釈においては、とにかく律法を守り、これを一点でも破らないことに重きが置かれました。偶然に、あるいは不注意にこれを破ることがないように、その防護柵となるルールが事細かに定められ、本来は自由と喜びを与えるはずの安息日が逆に重荷と苦しみを与えるものになっていました。それはまる

で安息日のために人間が存在するようなシステムとなっていたのです。

イエス様はこれらのご自身の言葉を受けて 28 節で「ですから、人の子は安息日にも主です」と言われました。「人の子」とはイエス様のご自分を指す時に使われた呼称です。そしてイエス様のこの言葉を理解する上で注目すべきは「にも」という言葉です。「にも」とは、これまで述べられて来たことに加えて、この安息日においてもという意味です。これまでこの福音書ではイエス様が様々な領域で主権を持つ方であることが示されて来ました。1 章では弟子を召すことにおいて、悪霊を追い払うことにおいて、また病気を癒やすことにおいて、また当時最も恐れられていたツァラアトの人をきよめることにおいて、主権を持つ方であることが記されました。2 章でも罪を赦す権威において、また取税人レビのような人を救い、弟子とすることにおいて主なる方であることが示されました。そして今日の箇所では安息日においても主だと言われています。パリサイ人たちは律法の専門家として、自分たちの解釈こそ正しいと自負していました。そしてそれに則ってイエス様の弟子たちを批判しました。しかしイエス様は彼らの解釈の誤りを暴露し、ご自身こそ安息日の主であると言われます。またこの「主」という言葉は神を暗示する言葉でもあります。パリサイ人たちからすれば、自分たちの解釈をひっくり返されたこと自体、面白くありませんが、それに加えてイエスは自分を「安息日の主」とまで宣言している。これは到底受け入れられない！という感情を彼らは抱いたことでしょう。しかしイエス様ははっきりとご自分こそ安息日の主だと言われるのです。ご自分こそ安息日を支配する主であり、この日の意味を正しく説き明かすことができる主であること、そして安息日の主としてこの日を御心にかなうように必ず導かれる主であるとされたのです。イエス様がそのような方であることは次の箇所をセットで読むことによって、より良く理解することができるように思います。

二つ目の記事となる 3 章 1 節以降でイエス様は会堂に入られました。そこに片手の萎えた人がいました。人々はイエス様がこの人を安息日に治すかどうか、じっと見ていました。それは「イエスを訴えるためであった」とあります。つまり最初から悪意を持っていたということです。たぶんイエスはこの人を癒やすだろう。それを見届けて訴えよう！と彼らは思っていたのです。イエス様はそれを知って、その人を真ん中に立たせます。イエス様はここで隠れておらず、むしろ人々の挑戦を受けて立っておられます。そして言われました。「安息日に律法にかなっているのは、善を行うことで

すか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも殺すことですか。」　ここの「彼ら」とは前の箇所から考えて、またこの後の6節に「パリサイ人たちは」とあることから考えて、パリサイ人あるいは彼らを中心とする人たちだったと思われます。彼らはこの日に癒やしを行うべきではないと考えていました。命に関わる緊急事態は例外です。たとえば助産婦が出産のために働くことはOKと彼らは考えました。しかし手の萎えた人の癒やしは緊急的なことではありません。ですからわざわざ今日しなくても良い。これまでずっとその状態にあったのだから、もう一日待ったところで何の問題もない。なのに癒やしのわざをこの安息日に行うなら律法違反であると彼らは考えていました。しかしイエス様は、苦しんでいる人の癒やしを明日以降にすべきだという冷淡な態度は、その人を殺すことだと言われたのでしょうか。善を行わないことは悪に加担することであると。さらにここには皮肉があるかもしれません。イエス様は片手の萎えた人を救おうとしておられる一方、パリサイ人たちはイエス様を殺すことに思いを向けています。彼らは律法の文字と自分たちの解釈にこだわっていますが、果たして本当の意味で律法にかなうのはどっちのあり方なのか？安息日の精神に違反しているのは誰なのか？とイエス様は問うておられるのです。これに対して彼らは黙っていました。

イエス様は怒って彼らを見回し、その心の頑なさを嘆き悲しみました。そしてはつきりここで対決されました。イエス様は片手の萎えた人に「手を伸ばしなさい」と言われました。これに対し、手の萎えた人は信仰を持って応答しました。萎えていたはずの手を伸ばすと、彼の手は元どおりになりました。彼は癒やされたのです。

この結果が最後の6節にあります。「パリサイ人たちは出て行ってすぐに、ヘロデ党の者たちと一緒に、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。」　パリサイ人たちとしては、これ以上この人を放置しておくことはできない。自分たちの伝統ある律法解釈が捨てられ、ひっくり返されようとしている。彼は我々にとって脅威的な人物であると改めて捉えたのでしょう。そこでヘロデ党の者たちと相談し始めます。本来、彼らは一緒に組むはずのない者たちでした。片や親ローマ派であり、片や反ローマ派です。本来油と水の関係にある者たちです。ところがパリサイ人たちはここで世俗の権力者たちと共謀して、イエスを除き去ろうと企て始めたのです。しかもこれを始めたのは安息日でした！これが安息日を大切にする専門家たちの姿なののでしょうか。安息日はこのように過ごすべき日なののでしょうか。

今日心に留めたいことは、イエス様はパリサイ人たちの挑戦を受けながらも、ご自分が「安息日にも主」であると明言されたことです。イエス様は決して安息日を無視されたものではありません。むしろ、この日を支配し、その本来のあり方を回復させてくださるお方です。イエス様は安息日は人間のため、人間の祝福のために設けられたと言われました。その権威ある解説に耳を傾けて、私たちもこの日の本当の祝福に生かされる者になりたいと思います。そしてこの日がもたらす祝福の一例が3章の記事に示されました。そこで手の萎えた人が癒やされました。これは人間本来の祝福ある状態、すなわち健康で完全な状態への回復を示しています。ここに神の国の祝福がまた現われました。イエス様は安息日こそこのわざを行うのにふさわしい日とされ、このことをなさったのです。しかし、この私たちに祝福をもたらすわざはただではなかったことも、ここに暗示されています。イエス様は安息日の祝福をもたらす方として、ここで殺されようとしています。たとえご自分のいのちを代償としてささげることになっても、この祝福をもたらそうとしておられます。そしてイエス様は実際に私たちの身代わりとして十字架上でご自身をおさげになり、その死を通して私たちに真の安息をもたらす方となってくださいます。イエス様の犠牲の死を通して私たちの罪は赦され、神に立ち返る道が開かれ、神との愛の交わりを通して真の安息を得ることができます。私たちはこの安息日の主に聞き従い、この方を通して与えられる真の祝福に生きる者とされたいと思います。安息日の律法は私たちを祝福するための律法です。私たちは安息日の主なるイエス様の言葉に聞いて、この日を正しく取り分け、十分に休み、主にあって神を礼拝し、真の安息の恵みに生かされたいと願います。律法主義的な考え方によってではなく、安息日の主なるイエス様の言葉に導かれ、この日の祝福に生きる者とさせられたいと思います。

またイエス様は、この日に「いのちを救う働き」に従事することがふさわしいことも示されました。自分自身が安息日の恵みを十分受けるとともに、他の人々もこの恵みにあずかるよう心を配り、そのために仕えることが、この日を定めた神の御心になうのであると。ですから私たちは、自分がこの日に祝福を受けることを求める一方で、他の誰かを攻撃したり、意地悪したり、あるいは無視したりするような態度でこの日を過ごすなら、それは大いに間違っていることとなります。安息日の精神にかなうのは他者のいのちを救う働きにも自らが関わることです。その人もまた安息日の恵みに生かされるようにと私たちの心と体を用いることです。そのように主に教えられ、

この日を御心に従って過ごすことを通して、主の安息日の恵みをさらに豊かに知り、
この幸いを宣べ伝えて行く歩みへ導かれたいと思います。